
読むな、危険！

貞次シユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読むな、危険！

【Zマーク】

Z7803A

【作者名】

貞次シユウ

【あらすじ】

下品でお馬鹿な男たちのショートストーリーのオムニバス。お下劣ですので婦女子の方は読まないでくださいね（ケータイ推奨）

ロッカールームラバイ（前書き）

ネット小説しか出来ない顔文字なんぞ使ってます。捷破りとは思いますが、ちょっと遊んでみました。

ロッカールームラバ

俺はしがない工場作業員である。昼夜交代勤務で過酷に働くいうなれば日陰もの。

しかしそんな俺にもドラマがある。当然幸せになる権利だつてある。幸運が突然転がり込んで來ることもあるのだ。

これはそんな俺のドラマチックな話なのさ

現在勤める会社には、作業服に着替えるロッカールームがあり、当然そこは男女に分けられている。

もちろん男が女子ロッカー室に入ることは許されないのだが、入るなと言われば入りたくなるのが人間と言つものである。

ある日の事。夜間勤務を黙々とこなしていたのだが、早めに仕事が終わってしまい、同工程の中川とどうしようかと相談していた。

「中川、どーするよ？帰るなら帰つてもええで」

「そーっすねー。柴崎さんどうするんですか？」

「帰る」

「ほんなら俺も帰ります」

この中川。眼鏡をかけた汗かきデブで、常に呼吸が荒い秋葉系23才である。基本的にはこんな奴は嫌いなのだが、何せエロビ、DVDを夜のビデオ販売店並みに揃えており、必然的に付き合いをしなければならなかつた。

男たるもの、時には己の信念を曲げてでもやむむなうこと
がある！

座右の銘とこといふか。

さて、着替えて帰らなければならないので、2人で更衣室へと向かう。その時、男子ロッカーへの入り口の5mほど先に女子ロッカーヘの入り口が見えた。

いや、いつも見ているのだが、普段はこちらが着替てる時間である。出入りが激しく、特に何の感情も湧かないのですが、今日は違う……

「あれ？ 着替えないんすか？」

入り口で立ち止まる俺に、いぶかしげに中川が声を掛けた。

「今何時だ？」

「7時半です」

「あと30分あるな」

その言葉と視線の先を読んで、中川もようやくその意図を理解したようだ。

「行くんスか？ ハアハア」

「あたりまえじゃ！」

未知なるものへの探求は男の口マンである。言つなればいま我々は川口探検隊。これは男としてやらなければならない事なのだ！

プラジャーやパンツが襲つてくるよ～（＊、＊、＊）

今一度周囲を確かめるところへ！

か～わぐつち～ひるしが～ ど～くつに入る～

『今は藤岡探検隊だつたな……』

ガチャリ……とノブを回すと中からは果たして何とな～く甘酸っぱいにほひが……

「柴崎さん、やつぱ汗臭い男ん！」とは違いますね

「嗅いどけ……」

「はいーー」

シユゴオオオ～（：：）（：：）

さて、ひとしきり肺の毛細血管の隅々まで口爽やかな空気で満たすと一歩前進。中へと踏み込んだ。

「な、なにいーー」

俺が驚いたのも無理はない。男子ロッカーは上下が半分に別れて

おり、したがつて一列を2人で使用しなければならない。

しかし女子ロッカーはなんと上下に別れてはいない。つまり我々の倍のスペースを使うことができるのだ。

「なんかこれ、バリむかつくんやけど……なあ」

と、中川に問い合わせてみたものの、すでに奴はロッカーの物色に取りかかっており、俺の問い合わせなど綺麗にスルーしている。

「鍵、やっぱり掛かってますねえ」

中川はそう言いながら次々とロッカーの扉の取っ手を順番に調べてゆく。そりやそうだ。男でさえ鍵を掛けている。まして女であれば……

「開きました！」

「なにい！」

俺が駆けつける間もなく、奴はすかさずロッカーの中に顔を突っ込み、トリューフを探す豚の「」とく鼻を鳴らして興奮していた。

「までや中川……」

「な、なんスか？」

「俺が先やろが！（――・）」

「ええ？僕が先に見つけたんスよ。柴崎さんも自分で見つけて下さ
いよ」

豚が一丁前にブーたれやがつたか……

ドスツ！

奴のわき腹にギャラクティカマグナムを叩き込む。

『豚ふせいがなめんな、この野郎……』

中川はしぶしぶとヘブンズドアを明け渡すと、俺に不満げな顔を向けるが知ったことではない。第一奴は基本がなっていない。よく見てる。

上に羽織るギンガムのシャツを眺め一拍三挙。そしてその手触りを楽しむように表面をなで、静かににほひを嗅ぐ。このときはまだ音を立てて嗅いではいけないのは言つまでもないだろ。そしておもむろに裏返して、そのオペーイの当たる部分に……

突撃！

「むふあおお～」

と、喜悦の声を発しながら豪快ににほひを嗅ぎ、味わわなければならぬ。これが日本古来の伝統であり、わびさびと言つものだ。小学校に入つて一番最初に習つこととは言つまでもないだろ。

その舌触りを楽しむように悦んで入つてゐる俺に中川が声をかけた。

「柴崎さん……あの」

なんと無粋な奴であろう。これから妄想モードに入らうとしている者に声をかけるとは礼を失している。そんなことは基本中の基本ではないか！

「あの……『言ひく』いんスけど……」

『言ひく』なら言わなければよからう！

『や』、竹中のババアのロッカーでした

『なにいー（…）』

竹中と言えば我が工程きつてのブ イク女。女といつか、女を捨てている40歳の巨漢女だ。

俺は猛烈な嘔吐感に襲われ、今までの人生が走馬灯のように甦つてくる。

「甦つてくる」

誰だ勝手に復唱してる奴は？（…）

『ゆせん、 ゆよひなり……』

「 ゆよひなり～」

『 … つてテメエが復唱してんじやねえぞコラアー。』

薄れゆく意識を引き戻したのは中川への怒りだった。

ドスツー・ドスツー・ドジドジドスツー！

ブーメランスクエアからテリオス、さらにスペシャルローリングサンダー（古い）が奴のわき腹に食い込んだ。

「痛いっスよ……何するんですか（：、ヽ）」

このエロ豚めが、最初に誰のものを確認するのは基本だらうが！誰のものとも確認せずに俺に獻上するとは何たる無礼！

とりあえずファブリーズで鼻と口の中を除菌すると落ち着きを取り戻す。

いかんいかん、俺としたことがこんな事で取り乱すとは……

『ブ イクの にほひに狂う 若氣かな』

おお、一句出来た。あとでメモって辞世の句としつづ。

気を取り直して再び探索を始めた我々だが、やはり他はすべて鍵が掛かっているようだ。

焦りを感じながら『やはり駄目なのか……』と弱気になつたそのとき……

力チャン

と軽い音を立ててそのロッカーは開いた。

「うお！開いた」

まるで暗い洞窟をさまよい歩き、歩き疲れた末に見つけた宝物のよつである。

期待感が高まり、下半身に血液が濁流のように流れ込むのを実感できる。

が、しかし：

しばし呆然とその開いたロッカーを眺める俺に中川が駆け寄ってきた。

「開いたんスか？」

喜び勇んで駆けつけたものの、やはり奴も俺と同じよつに絶望感を表に出す。

「空ですか…」

ガックリと肩を落とす中川。しかし俺は別の事を考えていた。そしてその隣を見ると、やはり名札のないロッカーが！

『いいともか？』

的中だ。ここもやはり空のロッカーだ。ここは2つの空きロッカーが並んでいたのだ。

俺はすでに他のロッカーを物色し始めた中川を呼び止めた。

「おい、入つてみろ」

「え？」

「H口に入つてみりー。」

そうである。ロッカーの上部には名札を差し込むための溝があるのだが、その隙間を利用すればもうすぐ始まるであろう婦女子の着替えシーンを満喫出来るはずなのだ。

「なるほどー中川、行きますー。」

喜び勇んでロッカーに身を潜り込ませる中川。しかしその作業は容易ではなかつた。

なにしろ奴はデブである。それでこのロッカーに入ろうと三つ二つだから、トトロにダイエットしようとついでに無理がある。

しかし… H口のパワーとはこれほどのものだろうか？

パソコンが普及したのはエロゲーのおかげである。携帯の液晶が進化したのはエロ画像のおかげである。歴史的世界の英雄がその版図を広げたのも原動力はエロである。

そして今、中川の体がロッカーに収まつているのも確実にエロの力なのである。まるで物理学すらも無視したかのような映像がそこについた。

『（ ；）恐るべしH口……』

「ひやひや取まつたようだ。」

「よし、閉めるぞ」

「いいスよ

ハハして奴はロッカーへと取まつた。

「どうよ？見えるか？」

中からは何かと格闘しているかのよつた荒い息遣いが響いている。

「ん…んん」

「見えるんか？」

「め…」

「め？」

「眼鏡がズレました…」

(- -)

「早よ直せや」

いろいろするハブに業を煮やした俺は、自ら隣のロッカーに体を滑り込ませると、扉を閉めた。

『む…これは…?』

見えん！（・・・）

光は確かに射し込んでいるのだが、田線よりもやや上方。つまり額のやや上あたりに穴が開いているのだ。

『「…」ここまで来て諦める訳にはいかん！』

俺はロッカーの中で爪先立ちすると、その穴へと眼球を寄せた。しかし…

『あ、頭がつつかえてますけど（・・・）』

そう、天井はそれほど高くはなかつた。従つて頭を上げるには限界があつたのである。

『ほほう、やりおるなロッカーめ。しかしエロに直面した人間の英智を思い知るがいい！』

縦が駄目なら横にすればよい。俺は首をぐいと傾げると、もう一度爪先を立てた。

『見よー』の頭の冴えを

もう少し…もう少しで天然ピンクホールに手が届く…

あと50m…

「いででで…首の筋つった！首の筋…（・・・）」

何という事だ、この俺としたことが一
猛烈な痛みが肩から首にかけて走る。そしてそれはロッカーの中
に悲鳴となつて漏れた。

「首が…首があ…」

「め…眼鏡が！」

「首があ…」

「眼鏡が！」

小刻みにブルブル震え、それは一旦任務の遂行を断念する事を意味した。

「仕方ない、一度撤収や

そう躊躇の中川に告げると、扉を開こうとしたが

『ノブがない…（ - - - ?）』

なんということだ！そつ、ロッカーには中から開けるための機能
が装備されていなかつたのである。当然押しても開かない。ロック
を解除するための取っ手もない…

こんな時アメリカ人ならばこいつであろう

『オーマイガード！』

当然フランス人なら

『フォアグルア、トリュフ、メンタイクオー！』

これが大塚アナならば

『＄ @ & ツ……ですね！』

と語尾しか聞き取れない台詞を言つだらう。

この時、冷や汗とはこんなに噴き出すものかと自分で驚いた。だが、もしや中川のロッカーならば閉まり方が甘くて、押せば開く可能性があるかもしれない？
わずかな望みかもしれないが奴に賭けるしかない……

「おーーそつち開くか？」

「め…眼鏡…」

全然駄目じゃん！（…）

しばらく狭くて自由にならない手でドアロック付近を探してみると、何やら小さな突起物が上から飛び出しているのが分かった。

しばらぐ狭くて自由にならない手でドアロック付近を探してみる。

『うやらこれを引っ張れば解除出来そうである。

がしかし、それはあまりにも小さく、摘む事が出来ない。

『うーむ、しないしょ?』

H口に突撃する時は人間の叡知は素晴らしい能力を発揮するが、それ以外はどうやら凡庸な脳みそしか持ち得ていないようだ。

しかしそれでもその突起物がキノコのような形状で上から摘む事は出来ないが、頭の部分の下の僅かな隙間に薄いものを滑り込ませれば持ち上げる事が出来そうなことは分かった。

『ふふふ、そうか。爪を引っ掛ければイケるじゃんよー。(、) サエテル~』

よしよし、ここ爪を……爪を……?

爪ないじゃん()

そう。実は早上がりを利用して、高級なお風呂屋さん（早朝割り引き）に行つていかがわしいぶれえを堪能しようと田論んでいた俺は、爪をきれーにこれでもかと言つほゞ限界まで切つっていたのだ。

『全然引っかかるんだー。おーい(-_-)』

またもや默考1分半…

(- - - !

おへ、やうだ。俺には仕事で使つてこぬパンセットがあるじやないか！

そり。半導体製造といつ極小製品を製造している俺には〇・何ミリといつ小さなチップを摘むためのピンセットが必需品で、それをいつも左の胸ポケットに装備していたのだ。先の鋭さは刃物並みである。これならば容易に隙間に入れることができよ。

早速左の胸ポケットから取りだそうとするが、何しろ狭い空間である。腕が思ひよつて回らない。

む……むむ……

『あ、これやっぱー。絶対やっぱー。』

と思つた瞬間

『背中ついたー・背中（ - - - ）』

口頃いかに運動してないかの証明である。妙な体制で力を入れるといったるところがつるのである。

痛みに耐えるー。

これが男の生き様である。たぶんいま俺は輝いて見えるだらう。だがいかんせんロッカーの中では誰も見てくれない！

仕方なくしばらく妄想でもして気を紛らわすが、どんな妄想だったのかはここでは伏せておく。

やがて背中の痛みも收まり、かわりにパンツの中が收まりつかなくなつたところで俺は脱出作戦を続行することにした。

『と…取れた（ 、 、 ）』

取れたー！

俺は声を大にして叫びたい。例えるならばRPGのような長い冒険の末、ラスボスを倒すためのアイテムをついに手にした時のようなものだろ？

かつこいい、かつこいいぞ俺！

頭の中では輝く聖剣をかざして、高らかにBGMが流れている姿を想像しているが、実際は妙に卑屈な格好で胸ポケットに手を突っ込み、隣で「めがね」と唸つてる中川の声が聞こえるだけである（ 、 、 ）

ようやくピンセットを手に取ると、しかし今度はそれを左手に持ち替えなければ届かない。

そのまま下に降ろしたいのだがなかなか届かない。

火事場の糞力！

ふんっ！…という掛け声と共に力を絞り出す。いつもの力一杯よりも20%増し（当社比）だ。

グッとロッカーと体の隙間に挟まれた腕が下に滑り落ちた。

『いででー刺さった、左手に刺さりへんひへー、、、、(』

涙が出てきた…マジで。
しかし俺は痛みに耐える。歯を食いしばり、額に汗を滲ませ耐える…

仕方なくしづらへ妄想でもして氣を紛らわすが、どんな妄想だったのかはいりでは伏せておく。

みづやく血が止まり、かわりにポチーンのカウパー腺液が止まらなくなると脱出作業を再開する。

『いいだー』

狙いすましたように隙間にピンセットを差し込む。ブルブルと震える指が慎重にピンセットを持ち上げた。例えて言つならば爆弾処理班があのれの命をも顧みず、信管の抜き取り作業をするようなのだ。

今の俺のかつらはおさらへそれと似ているものだらう。

『もう少し……』

研ぎ澄ました究極の技が光る。そして緊張の一瞬……

『よしー』

くいっとそれが上に持ち上がる手応えがある。しかしそのとき、遠くから女の子のしゃべり声が聞こえてきたのだ。

『まづいー。』

どうやら出勤第一号がやつてきたようだ。棟内に入ってきた廊下を歩いてくる。焦りは頂点に達した。

手に汗握るとはこのことだ。決して女の子が手口キする時に汗ばんだポチーンを握るという意味ではない。

さらには震える手を慎重に持ち上げる……と

力チャン

といつ音と共に扉が開いた！

『自由だ……（、ヽヽ）』

と惚ける暇もない。すかさず入り口のドアが開く音がするや数人の喋り声が入ってきた。

『やべえー。』

しかし幸いにもロッカーの列に阻まれて姿は見られていない。俺はその声の影を窺つた。

ラッキー！入り口と反対方向。これなら陰に隠れて脱出出来る。

俺は忍び足でドアまでたどり着くべくソソソと歩を進めようとしたそのとき、肝心なことを忘れていたのだ。

先ほどからの一度にわたる妄想。それはパンツに大きなしみを作っていた。これが乾くとなるか？ 賢明なる男性読者ならば覚えがあるうー。

『いでのででの……先っちょくつつけ！先っちょ（＼＼＼＼）』

思わず腰をかがめながらも足を止める訳にはいかない！オリンピック選手が足を故障しながらも完走した感動の場面が今の俺とダブる。

『わかるぞ、あんたの気持ちが！』

あと1三……

50cm……

そして……

長い冒険を終えた……

やり遂げた……そう、やり遂げた達成感だらう、これが。決して性欲旺盛な男子高校生が余韻に体を震わせながらティッシュを丸めているようなものではないのだ。

外に出ると朝日が祝福してくれた。爽やかな風が頬に優しい。

『しまつたー忘れてた（…）』

ここで俺は重大なことを忘れているのに気づいた。

『ビ、ビうすれば……置いてきてしまったぞ……』

いまさらビうなるものでもない。しかしここで引き下がっては男ではない！

俺は猛ダッシュで駆け出した。

『ソープの割引券忘れるとはしくつた……』

早朝割引は人数限定なのだ。俺は仕事場に忘れた割引券を取りに行くために全力で走った。

おわり

ロッカールームラバイ（後書き）

「こんなもの載せてすいません……。苦情が殺到するようなら修正しますので……」

スナイパー・ケア（前書き）

随分以前にとあるブログで使った小ネタを使い回してゐるトコがあり
ますが、知ってるかたは目をつぶってください（^_^;）

スナイパー・ケア

俺の名前は……おつと、残念ながら名前を明かすわけにはいかんな。『コードネーム』で『ケア』と呼んでもらおつか。つまり裏社会に生きるエージェントってわけだ。

仕事内容？

ふ、残念ながらそれも言うわけにはいかないな。とある組織に雇われたエージェント……それだけで十分だろう。

ピコリコリ！

高層マンションから夜景を眺め、葉巻をくゆらせている俺の耳に耳障りな携帯電話が無粋を働いた。また仕事の依頼だらう。

今度はどんなミッションだ？

テーブルの上で点滅している携帯を手に取ると、美しくなめされたクリーム色のソファへ腰を沈める。そしておもむろにフロップを開いた。

「わたしだ……」

『ああ、健一ねーおばあちゃんばつてんね、いま大変なことになつとつとよー。』

「あの、もしもし？間違いだと思つ……」

『台所で油が燃えとゆくやけビーコン番したほつが良かヒヤウツカ
?』

「一九〇一・一九番ですかからー。(、・・)」

『あー、もうやつたね。といひであんた、飯は食べていなかよしとな
?』

「早よせんかーっ！」

プリツ、プリツ、プリツ

俺としたことが、一般人を助けるとはヤキが回ったな。

自嘲気味に笑うと葉巻をクリスタルの灰皿に押し付ける。そのとき再び携帯が呼び出し音を鳴らした。今度は間違いない組織からだ。ボスが直接かけてきたということは極秘任務のようだな。

わたしだ

わたしのセリフだぞ

…ですか？」

「ふん、わたしを誰だと」

「もうだつたな。ではこれより

駅のトイレに別のエージェント

を送る。指示はここで受けってくれ

街の喧騒は既にこととれたかのようだ。そこに溶け込むようして俺は歩いていた。

黒のスーツに黒のネクタイはせめて俺に殺される奴へのレクイエム。胸のホールスターに収まる357マグナムが血を欲して疼いているようだ。ズシリと重量感を主張し、その凶弾を吐き出すのを今か今かと待っている。

「……」

交差点脇の歩道にそこだけがぽつかりと明るい口を開けている。この地下鉄の駅のトイレで次の指示を受け取らなければならない。革靴の響かせる硬質な足音が狭い通路に反響し、それは俺自身が死神にでもなったかのような錯覚に陥る。

『沈着冷静のケア』

ヒージェント仲間からはそう呼ばれていた。常に慌てることなく顔色ひとつ変えずにターゲットを始末する。それが俺をそう呼ぶせめるやうなのだ。

と、階段を降りる俺の前方から、ひとりの女が上がってくるようだ。しかし……

「こつはー！」

本能からはじき出される信号により、俺は一瞬で戦闘態勢に入る。それまで弛緩させていた神経を研ぎ澄まされた刃物のように変化さ

せると身構えた。

あと3m……2m……1m……

直視してはいけない。視線はまっすぐ前方に向けながら視界の端でターゲットを確認するのがプロの技というものだ。そしてもちろん殺氣は消し去らねばならない。素人には所詮無理難題だろうが……

そして……すれ違ったその瞬間！

チラ見。

よつしゃあ！完璧なギャルだ。デニムのフレアの超ミニスカのじたからはやや浅黒いしなやかな脚が伸びている。そしてその奥にはパラダイスが待ち受けているに違いない。今日はほついてる

首をすかさず回すとおもむろに腰をかがめ、視線の仰角を徐々に上げてゆく。

ここで素人は間違いを犯す。殺氣をみなぎらせているために女の勘を働かせてしまうのだ。

まだだ……まだ……

じわりと腰を反対方向へ回すと両手を階段へつぐ。

おお！幸せの黄色いパンツですぞー（*、*、*）

しかし俺としたことが狂喜のあまり殺氣を漏らしてしまったようだ。その刹那、女がこちらを振り向いた。

「ちょっと、何すんだ変態！」

「なんじやこらーつー！」

我ながらナイスな逆ギレである。さらに畳み掛けるように俺は言ひ放つ。

「ここで腕立て伏せして体を鍛えるのがなぜ悪いか！」

もちろんこれには他に『通学路ほふく全身』『エスカレーター腹筋』など色々なバージョンも取り揃えていることは言つまでもない。女は歯噛みして階段を駆け上がりていった。見事な完全勝利である。

おっと……仕事を忘れるところだつたな。

肩慣らしの前哨戦に気を良くした俺は、足取りも軽く駅構内のトイレへと踏み入れた。個室が三つ並び、向かいには小便器が五つ。極々オーソドックスなつくりと言えよう。目立つのはまずい。真ん中の個室に体を滑り込ませ、扉を閉めた。

待つ時間はほとんど無かったと言つてよい。足音がトイレの中に侵入してくると、それは躊躇することなく隣のドアを開いた。

極秘任務は得てして人目につかぬよう指令が下される。果たして薄い壁越しに話しかけられた。

「俺だけど

俺？誰だいつたい？

いやまてよ。もしやこれはあの人のことでは。『俺』ではなく『オーレ』と言つたのだとしたら彼しか居ない。

ブラジルの殺人鬼『オーレ・斎藤』だ。もはや伝説だと思つていたが……

「まさか伝説のあんたにこんなところで会えるとは思つてもみなかつたな」

同じ稼業をやる者にとっては雲の上の存在と言われている男だ。俺の胸にも感慨深い想いが湧き起つる。そして彼はこう言つた。

「調子はどう？」

なんだおい、随分フレンドリーなしゃべり方だな。

「まあまあですな」

任務の遂行の可否を心配しているのだろうか？ふふ……いくらあんたでも俺をなめて貰つては困るというものだ。

俺の手にかかるばあのトム・クーズさえ裸で逃げ出して猥褻物陳列罪でブタ箱行きだぜ。

しかし次に彼が放つた言葉は俺を愕然とさせた。

「ボーナス出た？」

なんだと？！ ボーナス？

ちょっと待て、この仕事を始めて既に20年になるが、ボーナスなど一度たりとて貰つたことはないぞ……もしかして他の奴はみんな貰つていいのか？

ここは素直に答えるべきだらうか？ いやしかし、俺だけ貰つてないとなればそれだけ評価が低いと言つことを公言する事に他ならない。

いや、そんなことがある訳はない！

「も、もうひん！」

やはり貰つてないなどとは……俺のプライドが許せなかつた。すると彼はこう言つた。

「『めん、隣に変な奴がいるみたい。かけなおすから

なんだとおつ！』……」

とりあえず隣の個室に向かつて二発ほど弾丸を撃ち込んでおく。秘密保持の為ならば致し方ないだらう。

「おいおい、サイレンサーも無いのに……」

反対側の個室から聞き覚えのある声。いつたいいつの間に……

「……相変わらずの無茶ぶりだな。『品格の底』のケア君」

「『沈着冷静』だ！ 何度言えば分かるんだ、ジョニー？」

「さて、これからの指令だが」

「聞けって、俺の話を」

「これから歌舞伎町へ行つてもらひ。そこで次のHージェントが声をかけてくる手筈になつていて。声を掛けられたら合図言葉を言うんだ」

随分と危険な場所だな。この俺にしか出来ないミッションのようだ。

「で、合図言葉だが……『ハイよろこんでーー』だ。後はそのH-ジョントから指示があるだら」

「なるほどわかった」

「おつともう一つ。もつ時間がない。悪いが全力で急いでもらおう……欽ちゃん走りで」

なんと、かなり過酷な指令だな。まあ目立たぬように急ぐためなら致し方ないだろう。

「わかつた。ところでジョニー、あんたボーナスは貰つたか？」

「もちろんだ。なぜだ？」

「いや……なんでもない」

人混みを縫うようにして俺は風を切り、涙を切って走り抜ける…
…欽ちゃん走りで。

今日の俺は危ないぜ。ターゲットには悪いが容赦はしない。血の海に沈めてぶちまけた脳みそを集めて『ウンコマン』と書いてこいつ。

俺は予定の時間に遅れることなく、雑多な欲望の匂いの立ち込める歓楽街へと足を踏み入れた。

さて……ヒーロントはどうだ？

組織の人間らしき闇の匂いを纏う奴を嗅ぎ分けながらゆっくりと歩みを進める。

だが、十歩と歩いていないだろ？。すぐに黒服に身を包んだ男が声を掛けてきた。

どう見ても一般人には見えない。一見ほがらかに見せてその実鋭い目線を四方に走らせている。どうやら『マイツ』のようだ。

「どうですか？若い娘いますよ～

「ハイよひこんでーー！」

「やる気満々ですねーどうぞこれからへ

奴の言われるままでついて行くと、いかにも座しげな店に侵入してゆく。

ほづ、こきなり正面からか……気に入つたぞ。

武者震いに体をよじらせながら、俺も堂々と足を踏み入れる。暗い店内に怪しげな音楽が流れ、カウンターだけが明かりに照らされている。

「どなんのが好みですか?」「

奴はメニューのようなものを掲げて俺に見せてきた。なるほど、殺し方は任せるとこ「う」とか。

「今日は血に飢えてるんでな

「あー……いまちょっとコースは空いてないんです。Mコースでどうでしょうか?」

「どうちでもいいや

殺し方などどれも似たり寄つたりだ。その殺し方をしてくれと言われば俺はプロだ。きつちりと仕事をこなすだけさ。

「それじゃ2万円ちょっとになります

なにいーつ!?

それは一体どういう訳だ?貰つながらともかく仕事前に金を払うな

ど聞いたことがない。

「こいつから先に金を払つておひなになつたんだ?」

「いやいや、当たり前ですよ。その代わりアッチは保証しますから

」

なるほど、保証金と書つわけか。それならば良こだらう。とりあえず言われた通りの仕事を済ませば問題ないはずだ。

「では」

せりに奥の小部屋に連れて行かれた俺の田の前にまわるビニレザーファッションに身を包んだ女がふんぞり返つて座つていた。

もしやこの女はクライアントなのだろうか?

「俺はどいつもくれば良いんだ?」

まず詳しい要求を聞くために口を開いた。

「パンツ脱いで四つん這いになつてケツあげな!」

「えつ? (- - - ?) 」

「ピシーッー・ビシーッー!

「せりせり、もつと良こ頃でお鳴きー。」

「ハイよおじさんでー！（トトト：）」

ぬいぐ…… 今日の「ナッシュショーンはハーデだぜ……

おわり

Do health in...

ここは日本一の歓楽街『歌舞伎町』である。私は一人、顔はそのままに目線だけを右に左に、そして上にとせわしげに動かしながらこの街を迷っていた。いや、正確にはあるものを探していたのだ。

ヘルス！

この私、樋口利夫22歳。初めて風俗なるものを体験すべく、この欲望渦巻く街へと足を踏み入れたのだった。

「お兄さん、若い子いるよ
「抜いて行きましょうよ
「お探しですか？」

次々と声を掛けてくる呼び込みの黒服達を搔き分ける。友人から聞いた話では呼び込みする店は危ないとの事で、安心な店を教えてもらつてはいた。しかしこれだけ店が並ぶと田代りしてしまい、別の店にも食指が動くのは致し方ないだろつ。

『性戯のヒロイン』
『アソコにおまかせ』
『でかいの中心でパイを叫ぶ』

などなど煌びやかで怪しげなネオンが私の性欲をこれでもかと煽つてくる。

むう……悩むところだ……

しかし結局安全策を取り、友人の勧める店へと足を向けた。だがこれは決して私がヘタレなわけではない。友人の顔を立ててやつたと解釈してもらいたい。

『あそこの110番』

とある雑居ビルの3Fにその店はあった。

小さなエレベーターに乗る前に深呼吸し、心を平静に保つ事に努める。なにしろ行くのは風俗店。もし風俗デビューなどと見破られたら嘲笑の対象になるだけでなく、あるいはボッタクリの憂き目に遭うということも想定出来る。

ここは堂々と、とも慣れた遊び人を装わなければならぬのだ。
ここは日本の頂点に君臨する歓楽街歌舞伎町である、もはや戦場なのだ！

エレベーターのボタンを押す。なにやら中がイカ臭いのは気のせいか？

すぐに3Fに到着し、ドアが開いた。

「いらっしゃいませ！」

おわーびっくりした（　　）

扉が開くや否や元気な声で一発かまされた私。なんでボーカルがいきなり出迎えているのだ？

いや、これは作戦かも知れない。客の反応で初めてか否かを判断しているのでは？

ねつとつと……引つ掛かるとども思つたのか？』のベナチン野郎（・、ー、）

私はやおらポケットに手を突つ込むと、足を開き気味に歩み寄り尊大な態度で声を掛けた。

「おひ」

元壁だ。この堂々たる態度、とても初めてとは思ひまへ。

男は愛想良く俺を暗い店内へ導くと問い合わせてきた。

『『酒店の』利用は初めてですか？』

え？（・、）

「あ…と、『酒店』は初めてダス……」

「わああーーー。（・、・、・）やべえ。

一瞬びくり縮えたら良いのが判断出来なかつた私は、思わず『この店』を『『酒店』などとつられて言つてしまい、しかも語尾は『だ』と『です』が混ざつて『ダス』になつてゐるー

み…見破られたか？いや、まだ決定打とは言えぬ。まだ挽回のチャンスは充分あるはずだ。

続いてまたボーアイが口を開く。

「コースはどうなさいますか？」

な、なにい～！「コースだと？」

「、これはどう答えれば良いのだ……

いきなり何の説明も無しに聞くと言つ事は、恐らくほとほとの店も大してシステムは変わらないと推測出来る。ならば、当然知っているかの如く答えなければ怪しまれる！

当たり障りのない言葉なら大丈夫か？当たり障りのない……普通の……そうか！

「レ……レギュラーで！」

「レ……あ、お時間ですが？」

フルスイング空振りーつ！

まずい！これはかなりまずい！何とか取り返さねば取り繕わねばならない事になる！

逆ーつー（ ； ）

「あ、ああ時間ね、時間……」

最初から時間で言わんかいボケーつー

「の私ともあわつものがなんたる醜態だらつか！」

とつあえず40分コースが標準のよつだ。それを選択すると、続けてまたもやボーアイが聞いてくる。

「おまかせですか？」

「おーっと、これが手か？あーん？」

それでポッキリとか言つといてほつたくる気ではないのか？私を誰だと思つてゐる。そんな手に乗るはずがなかつてー。この欲望をエサに生きる、キブリ野郎めが（ * ）

だがボーアイはそれを見透かしたかのよつに付け加えた。

「一千円のみの追加ですよ」

なんだロイシ、なんか見下したような蝶つ方じゅーのーのー（ * ）

「おまかせ、ダーンと構えねば……」

「お、お、お、あるつもつだよもわづこ」

私は渡されたアルバムをおもむろに開くと、ひょいと純情そつな娘を指名した。

「お、今日おの杏奈ちゃんするわ

「すいません。この娘は今日居ないんですが……」

なんですねと？居ないなら最初から言わんかいー（、皿、：）

「ほら、ここに曜日が書いてありますんで……」

見れば『真の右上に出勤する曜日が書いてあるではないか。

むう…これはマズイ…。『こんな事も知らんの？』みたいな顔で見られている気がする（、、：）

だが、私の機転はこういう時天才的な冴えを見せる。

「あれ？きょう土曜日じゃなかつたつけ？」

「いえ、火曜日です」

……チョット離れすぎだつたか？まあいいか。

再度別の娘を指名すると、『よいよ部屋に通される。ふふふ、私とあらう者がちょっと心臓がときめいてしまつたようだ。高鳴る鼓動と欲望で我が息子がいきり立つてきた。

おお、息子よ。もう少しのチン抱だぞ

ここで私の頭に素晴らしいアイデアが浮かんだ！まさに天才的、

これぞ天才的と言つべきものだ！

まず素っ裸になり、自慢の大黒柱を隆々と掲げ女の子を待つ。なにも知らずに入ってきた女の子はそれを見て驚きの声を上げるだろう。インパクトが大事なのだ！

そして強く印象づけられた大きなイチモツは彼女の心を虜にし、まあ恐らくはアソコをナイアガラ状態にして挿れてくれと懇願するであろう。普通のエロ男ならば一も二もなく突っ込む所だが私は違う。じつは嘘つのである。

『そこには好きな男にとつときな』

クールである。超クールうう～（ ）

こんなことなら成人用パンパース買っていれば『とつとけ』とダメ押しできたのだが、まあそこまで完璧を求める事もなかろう。

それでも当然女は私に溺れ、金を貢ぎながら私の体を求めるのだろうな。

幾らくらい貢いでくれるだろうか？

そうと決まれば善は急げである。

私は服を脱ぎ、パンツを投げ捨てるソファーにどつかと座り、グイグイと息子をじこきあげる！

更に私は思い切りインパクトを『えようと工夫して、カエルがひっくり返ったような態勢で宇宙戦艦ヤマトをおつ勃てた。

ヤマト発進！『おお、恥丘か……なにもかもみな恥ずかしい』

よしよし、この沖田艦長の名セリフも付け加えとくか

今が今かと期待する時間は長く感じる…

「失礼します。お飲物をお持ちし……」
「！」

「失礼します。お飲物をお持ちし……」
「な……なにい！」

ボーアイー？（；。）

そういうえば入る前に飲み物を聞いてきたが、まさか貴様が持つて
くるとは……

奴も硬直しているが、私とてそれは同じである。

ただ……（反り返っていた白慢の宇宙戦艦がしわしわと萎え……最
後にペタンと萎んだおいらんさんに張り付いた事を除いて……）

おわり

後ろから前から……

朝の駅のホームは相も変わらずサラリーマンやオーハー、学生たちで溢れかえっている。

張り切つて街を照らす太陽とは対照的に、一部の固まつて奇声をあげる学生たちを除けば、一見すると誰も無口で憂鬱そうな表情を隠さずボーッと突つ立つっていた。

かく言う俺もその中のひとりだ。新調したばかりのスーツに薄い鞄を下げて、見るともなしに反対側のホームを眺めていた。

時計を見ながらいつもより三分早く着いたな……と、ため息をついた。一分の待ち時間もやたら長く感じ、苛立ちを覚えるのだ。

それがきつかけだったのかは定かでないが、じじでいつもの朝にちょっととした変化が訪れる。たまには別の車両に乗つてみようかと考えたのだ。

そうして俺は前から五両目後方のドアの列を離れて、さらに後ろの車両へと歩き出した。

少し立ち位置をえるとなんだか駅の風景も変わるようだ。居並ぶ人々の顔をチラチラと見ながら歩を進めて行くと、はっと目に付く女性を見つけて足が止まった。

(こんな美女がいたとは……)

眼鏡をかけ、知的な雰囲気をスーツに包んだスレンダーな美女が、

まばゆいばかりの光彩を放ちながらソロヒトに立っていた。

満員電車のなか、オヤジもに取り囲まれて目的の駅まで行くのが幸せか、それとも美女を側に置いて行くのが幸せかは問うまでもないだろ？

俺は迷わずその列へと列づことにした。

やがて塗装をケチつたかのような金属肌を剥き出しにした電車がホームに滑り込んできた。ここからが男の闘いだ。

周りの野郎どももおそらくは同じ考え方を持っているに違いない。遠慮や謙虚な気持ちは捨て去らねば勝利は有り得ないのである。

ドアが開く。もううんこんな駅で降りる奴など贋無に等しい。一斉にドアへと殺到するライバルたち。

田標をロツクオン！

しかし、俺とターゲットの間には、何人ものオヤジもが割つて入ろうとしているではないか。

（あせるかあーーー）

血しぶきが上がり、火花は山々を照らし、谷は吠える（イメージです）。俺は迫り来る敵をちぎっては投げちぎっては投げ、血震いしながらメガネを田指す（あくまでイメージです）。

前方のオヤジの脇に腕をねじ込むと、左に押しやりながら体を割つて入れた。

(まだだ……もう一人!)

今度は背の高いオヤジを右に押しやろうとしたが、なかなか動かない。ぴたりと眼鏡美人をマークしてまるでストーカーのようだ。

(くつ……この変態オヤジめが……)

『敵を知り己を知れば百戦危うからず』

ふと頭に浮かんだのは中国の故事だ。なるほど奴は体が大きく力が強い……

(だが、足元はどうかな?)

ここで俺が繰り出したのは『膝カツクン』だ。己の膝を相手の膝裏にぶつけてバランスを崩すという世にも恐ろしい格闘界でもおなじみの必殺技だった。

不意をつかれた男の体がバランスを崩す。このタイミングを逃してはならない。俺は人波に押されるフリをして男をリング外へ押しやった。

(やった!)

歓喜の表情を浮かべる俺の目の前にはあの眼鏡美人の後ろ姿が……

(な、なんですよーー!)

後ろ向きではない、こちらを向いて正面同士の密着スタイルでは

ないか！

思わず展開に動搖が隠せない俺とは対照的に、何事もなかつたかのように素知らぬ顔で電車は動き始めた。

その直後である。眼鏡美人と密着するといつシチュエーションに反応した心臓がフル回転しだすと、大量の血液を下半身の一点に送り込み始めたのだ。

(い、いかん！)

俺が慌てたのも無理はない。眼鏡美人は両手でバッグを前方に提げているのだ。そしてその手はモロにマイ・シークレットゾーンに押し付けられているではないか。

かたや俺の両手は無理に突撃した為に捻れて他人の間に挟まり、元に戻せないでいるのだ。

(痴漢に間違われる！)

この恐怖が頭を支配する。こんな所で人生を終わりにするわけにはいかない。俺はまだまだ若いんだ。

しかしその意志とは反対に、どこまでもマックスを目指そうとする、場の空気が読めない我が息子。

特番の警察の取材でよく痴漢で捕まっているオヤジがいる。

『何にもしてねえよー。』

と叫びながら、顔となぜか股間にモザイク入れられたみつともない姿を晒す性犯罪者……

(冗談じやねえ!)

俺は唇を噛みしめると神経を逸らすべく眼鏡美人から視線を外し、上を見上げる。

(「……これは?」)

と、そこにあつたのは艶めかしい肢体を露わにした、ほし あきちゃんを載せたゴシップ誌の吊り広告ではないか!

「エイ、エイ、おぱーい(*ノノノ」

ちがーつ(・・・)ー

完全に裏目である。火に油、過食症に食い放題、風俗前にユンケルだ。

もう股間は六甲の山々ほびてびえ立ち、おにじい水まで絞り出せんばかりではないか。

しかし「」で俺はある「」と口付いた。確かに股間は「」ンジャラスな状態ではあるが、決して意図してやつているわけではない。しかも触つているのはむしろ相手のほうなのだ。嫌ならば向こうが手をどかせば良いだけの話ではないか！

やうこ「」となら「」の状況を楽しんで良いのではないだらうか？

「」バイトの頭脳でそのような結論に達した俺は、ようやく周りを見渡す余裕が出来た。すると、何やらケツがやけに熱くなっていることに気が付いた。

（ん……なんだ？）

じんわりと尻を湯たんぽで温められてくるような感覚。そしてねつとりと貼り付いてくるような感触。

と、そのとき湯たんぽがぬるりと蠢いた。

（え？　え？　もしかしてこれって……ケツ触られてるのか…）

今度は後ろに神経が集中した。男のケツをまさぐるなど、これは噂には聞いていたが『痴漢』ならぬ『痴女』に違いない。

いや、前の眼鏡美人も一向に手をすりむことこのを見ると同じ類なのかも知れないのだ。

前から後ろから……こんな電車なら毎日乗つてみたい

そんな妄想をしていると、後ろの痴女が気になるものである。俺はこれでもかと首を回し、後ろをチラリと確認する。そしてそこには見たものは……

(誰だ、ここのハゲオヤジ(　・・)ー)

そう、ツルツルに禿上がった頭とは対照的に濃い眉毛のオヤジがニヤニヤしながらそこにいたのだ。あまつさえ目が合ひと懸びれる風もなく黄色い歯を見せてニヤリと笑った。

(もしかして……ホモの痴漢?)

頭の中はパニックだ。よもやホモの痴漢がいるなど考えも及ばなかつたのである。悪寒が背中を走る。鳥肌が首まで上がってきた。

(じいじい、じいじよひへ・)

硬直する俺を見透かしたかのよつて、オヤジの手は激しさを増した。

そこにはB級小説のような甘さなどひとかけらも存在しない。これが現実だ。十年くらい経てば『オジーンズ・ラブ』なるジャンルが存在するであろう。

(と、とにかく逃れなければ…)

俺はなんとか逃れようとケツをよじってはみたものの、そんなものの何の解決にもなりはしない。それどころか眼鏡美人に息子をぐい

くこと押し付ける結果となってしまったのだ。

その時、見下ろしていた彼女の頭が動き、睨みつけのような表情で顔が向けられた。

(めつちや怒つてはるーっ(一一一)

このままでは俺は痴漢のレッテルを貼られてしまうだろ?。ここなり手を掴まれて『このひと痴漢です!』などと叫ばれたらどうしよう?

すかさず俺もオヤジの手を掴んで『このひとも痴漢です!』と言ふのか?

出来ん! (一一一)

シチューハーシヨン的に一番恥ずかしいのはどう考へても俺だ。

例え罪を逃れたとしても、この電車を利用することなど出来はない。

おそれらぐ陰で『穂茂尻撫郎』や『ゲイ達者』などと勝手にあだ名され、下手すれば都市伝説にも成りかねない。

田の前が真っ暗になつてゆく。それでも俺の息子は相変わらず場の空氣を読まずに元気はつらつだつた……

さらに激しさを増すオヤジの手。さらに激しさを増す俺の腰の動

や。 さらに激しさを増す彼女の怒りの表情。

その激しい水面下の沈黙がついに破られた。

「ちよっと、何してるんですか?」

眼鏡の奥のまなじりを裂いて、彼女の一言がついに出了だのだ。

心臓ドックーンである。

「この時とつさに考えたのは責任逃れだ。 いつもなりやもうヤケクソである。 僕はすかさず彼女の言葉を伝言ゲームのように後ろへ送つた。

「ちよっと、何してるんですか?」

そのままを見た彼女が言葉を続ける。

「いい加減にしてください」

「いい加減にしてください」

ここで彼女は苛立ちを感じたのか、少しトーンを上げた。

「大声だしますよ」

「大声だしますよ」

そこまで言つと、今度はオヤジがつぶやいた。

「ホントは好きなクセに

俺は反射的に前に向き直り、その言葉を繋いでいた。

「ホントは好きなクセに……あ（－－－？）」

烈火のごとく怒った眼鏡美人。車内のガラスが震えるほどの大声を張り上げた。

「痴漢でーす！」

次の瞬間いきなり羽交い締めにされた。振り向くとそのハゲオヤジだ。

「コイツですね！」

「オメエだろが！（、 、 、 ）」

かくして俺は人生の落伍者となりはてたのだ。

『気を付けよう、眼鏡美人とホモオヤジ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7803a/>

読むな、危険！

2010年10月10日08時14分発行